Rotary Rotary International District 2500

2021.4.8（木）
第29回例会
（通算3623回）

2020-2021年度
釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン『Together! 次世代へ共に築こうロータリー！』

2020-2021 年度
国際ロータリーテーマ
ロータリーは機会の扉を開く
2020-2021 年度
RI 会長 ホルガー・クナーク
第 2500 地区ガバナー
松田 英郎（富良野 RC）

第84代会長　舟木　　博
副　会　長　土橋　賢一
幹　　事　荒井　　剛
編集責任者　クラブ会報雑誌委員会

例会日　毎週木曜日 12:30 ～ 13:30　夜間例会 18:00
例会場　釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局　釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F
0154-24-0860　0154-24-0411

月間テーマ	母子の健康月間
本日のプログラム	講師例会「災害ボランティアに参加して」（担当：社会奉仕委員会）
次週例会	地区研修・協議会に参加して（担当：次年度理事会）

■ロータリーソング：「四つのテスト」　■ソングリーダー：前田　秀幸君
■会員数　96 名
■ビジター　なし
■ゲスト　災害支援くしろネットワーク　佐々木　隆哉様、同　山本　真吾様

会長の時間

土橋　賢一副会長

久しぶりのお食事ですので、噛みしめてゆっくりお召し上がりください。

昨年 12 月に北海道が発令したコロナの集中対策に併せて休会になってから２月 18 日に例会を再開するまでの約２カ月、そして例会を再開してから本日までの約２カ月、合計４カ月間にわたって皆さんにご不便をおかけし、大変心苦しく思っております。３月に皆さんにお願いをしました例会のスタイル、スクール方式で短時間、食事はなしで弁当をお持ち帰りいただく、このことを次の理事会までやらせてほしいとした期限が先週でした。先週の例会の後、理事会を開き話し合いました。大方の意見は「本来であれば、まだ早いだろう。しかしながら本当はみんなで食事をとりながら例会をやりたい」が本音であります。

大阪と東京での感染者が急増しておりますが、いま釧路では落ち着いているようです。引き続き感染対策を講じながら、静かに例会を進めてまいりたいと思います。また、これからの状況次第では、再度変更が余儀なくなった場合には皆さんのご理解ご協力をお願いしたいと思っております。

また、本日の例会は『災害支援くしろネットワーク』のお二人が災害ボランティアの話をしてくださいます。活動内容をネットで拝見させていただきましたら、東日本大震災支援くしろネットワークの女性班として、当クラブの吉田潤司ガバナーの奥様・敦子様の活動報告の記事が出ておりました。2011 年５月に岩手県釜石市地区へボランティアで行った時の報告でした。

実は、私も 2011 年５月に三陸沿岸に行ってまいりました。その時のことが脳裏に甦ってきました。その時の話を少々させていただきます。

当時、港が壊れて直接現地へ行く手段がない中で、友だちと私の２人で小樽から新潟港に上がりました。そこに東電の柏崎刈羽原発がありますけれども、そこの展示施設を見てまいりました。

原子炉のポットのような物の断面を展示していて、世の中にある鉄筋で一番太いものが 51 ㎜、５㎝位の直径があるのですが、それがこのポットの周りにたくさん組んであります。その他に１ｍも２ｍもコンクリートが打ってある施設です。それがあの時、吹き飛んでしまったのです。ですから、施設が吹っ飛ぶくらいすごかったのだと思ったのです。

東電の施設ですから、ここの職員の皆さんが東電の社員です。すごく申し訳なさそうに展示施設の中で働いていて、どこかのおばちゃんが「頑張ってね」と声をかけていたことが印象に残っております。

その後、僕は仙台から北上しました。友だちの知り

合いの・知り合いの知り合いが陸前高田にいるということでした。テレビを見て、自分が生きている間にもう一度あのようなことが起こるかもと思って、絶対自分の目で見ておきたいという衝動に駆られて、ワゴン車にできるだけたくさん物資を詰めて行ってきました。途中、三陸海岸ですからリアス式の海岸、このあたりでは羅臼みたいな所だと思います。山を上がって下りると街がある。また山を上がって下りると街がある、そんな所です。山を上がった所に枯れている川がありますが相当山奥で、そこまでゴミが流れて来ています。こんな所まで津波が来たのか、と思いました。山を下りると、はるか何キロも向こうに街が見えるのです。その間には家がきれいに流されてしまって、基礎だけが残っているからすごく見通しが良くて、「こんなこと起こるのだな」とゾッとしました。

また、ある街では、鉄筋コンクリートの病院だと思いますけれども、４・５階の窓が抜けていました。泳げてもおそらく助からないでしょうが、あんなところまで水が上がるのだとびっくりしました。その時、自衛隊の方が活動をしていて、僕らが車を降りて近づくと活動を止めています。ご遺体を探していると思うのですけれど、そういうところは見せられないと活動を止めてしまいます。ですから僕らが迷惑になっていると思い、すぐ車に帰りましたけれど、こういう活動をされている自衛隊の方々に頭が下がる思いがしました。

陸前高田に着き、目的の人がいました。そこで物資を下ろして帰って来ました。帰る時は、陸前高田から北上したけれど、行けども、行けども同じ風景のガレキがすごくて、辛うじて自衛隊が架けた橋があって渡ることができました。乗用車も大型トラックも家も、そのままの形で川の中にありました。「やっぱりこのようなことが起こるのだ」と。ただ、見ているうちに気持ちが悪くなってきました。友だちと「これ以上、いくら上に行っても同じじゃないか」と言って、内陸に入って新潟から帰って来ました。

その物資を届けた方からはその後全く何の連絡もありませんでした。お礼がほしくて行ったわけではないのですが、気になって。そのうち忘れていました。秋になって友だちのところにハガキが１枚届きました。「実は、あの後、家内が自殺をした。それで絶望してしまってお礼が遅くなりました」。せっかく救われた命ですけれど、亡くなった方もいるでしょうし、あの街を見た時に「元には戻らない」と奥さんは思ったのではないかと。そのくらいひどい状況でしたので、それを聞いてすごくショックでした。それが東日本大震災でした。

私は３年くらい前に、同じ友だちと九州を縦断して行った熊本も被災しているのです。熊本城では、すごい仕掛けで大天守・小天守という天守閣の２つを直していました。でも、石垣も蔵もまだ手付かずの状態で、蔵なんて１本の柱だけでブラブラしている状態。早く土で埋めないと横転しそうな状態でした。その夜、居酒屋で話を聞くと、「大天守・小天守は熊本の顔だから直さなければならない。その次は、自分たちの民家だ。お城ばかり直してられない」と居酒屋の店主が言っていました。日本中、北は北海道から災害列島というくらい災害が起きております。

少々時間が長くなりました。この後は、佐々木さんたちのお話を聞かせていただきます。

ありがとうございました。

幹事報告　荒井　　剛幹事

２点ございます。１点目ですが、毎年行われておりました分区の「飲酒運転撲滅及び交通事故防止キャンペーンパークゴルフ大会及びロータリアンマスターズゴルフ大会」ですが、今年度はコロナウイルス感染症の影響を受けまして中止、という連絡がございました。

もう１点です。先週理事会が行われましたが、議事録が後方のホワイトボードに掲載されておりますのでご確認のほどよろしくお願いします。以上です。

親睦活動委員会　佐藤　貴之委員長

親睦委員会の佐藤です。本日お越しの山本様ですが、私の中学校の時の先生です。私は直接教わったことはないのですけれども、１つ下の学年の担任だったと思います。

30 年ぶりにお会いしまして、先生に先ほどご挨拶をしたら、きちんと覚えていてくれてすごいなぁと思っています。当時の緑陵中学校は、生徒が１クラス 40 名ほどで７クラスありました。学年が違うのに１人の私を覚えていてくれてとてもありがとうございます。本日はよろしくお願いいたします。

■本日のプログラム■
講師例会「災害ボランティアに参加して」

社会奉仕委員会　委員長　吉田　英一会員

皆さん、こんにちは。今年度の社会奉仕委員会としては、一般の方々を巻き込んだ活動をすることによって、『超我の奉仕』をさらに明確にする考え方で委員会方針を掲げさせていただきました。

僕は「超我の精神とはどういう意味ですか」とロータリアンの先輩にお聞きしました。その答えが人それぞれ違ったわけです。中には「俺に聞かないでくれ」

と言った方もいらっしゃいましたけれども、それぞれ皆さんが思う超我の奉仕は違うかと思います。
今日は、その超我の奉仕とはどのようなものなのかをさらに明確にするためにふさわしい二人に講師をお願いさせていただきました。
３・１１からちょうど 10 年が経ち、４月 13 日に行動を起こした『災害支援くしろネットワーク』の佐々木隆哉代表と山本真吾副代表に今日は時間の許す限り講演をしていただきます。
その講演を聞いた上で、超我の奉仕とはなにかを感じとっていただければ幸いでございます。本日は、短いお時間ですけれども皆さんよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

災害支援くしろネットワーク
世話人代表　佐々木隆哉様

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました災害支援くしろネットワークの代表をしております佐々木と申します。本日、短い時間ですがどうぞよろしくお願い申し上げます。
冒頭に「どうしてこの会を設立したのか」という経緯をお話させていただければと思います。
岩手県下閉伊郡山田町という所に僕の友達がおりまして、震災後、全然連絡が取れなかったのですが、10 日ぐらい経ったころに知らない電話番号から連絡が来たのでびっくりしました。
「家も車も携帯も全部流れてしまった。でも自分は生きている。建てたばかりの新築の家が流されて、もともと住んでいた山の上にあった古い家に戻った」という話を聞きました。「避難所に行けばいろいろな物資をいただけるのですが、家に避難をしていると物資がなかなか届かない」という話も聞いたのです。電話が終わった後に、僕の知り合いに「何とかして東北に支援に行きたい。その友達にも会いたい。もしボランティアできるならしたい」という思いを話し、いろいろな人にご相談をしました。３月末ころから活動をして、僕たちが行って迷惑がかからないように、自分たちが泊まる所、車、レンタカーや、ガソリンがきちんと手配できるかなどを全部計算した上で、最初に岩手県の遠野町に行きました。そこでボランティア活動をさせていただき、４泊５日で釧路に帰って来たわけです。
さきほど土橋副会長も言っていたとおり、本当に目にあまる悲惨な光景を目の当たりにして来たので「１人でも多くの方に行ってもらえないか」と考えました。そして「行ける人には行ってもらおう。行けない人には後方支援をしていただこう」、そんなシステムをつくりました。釧路クラブの中にも、われわれの会にご協力をいただいた方々も多数いらっしゃいますし、参加していただいた方もいらっしゃいます。本当にありがとうございました。
５月に新聞で募集をかけたのですが、その時に副代表をしております山本先生や吉田潤司様の奥様・敦子さんが一緒に行かれています。それが、後に『くしろ子ども未来塾』となって釧路で活動をされております。
われわれもちょうど 10 年経ちまして、くしろ子ども未来塾もちょうど 10 年目と。その中で『９４６５３０（釧路ゴミゼロ）の会』もわれわれの会の中からできあがって現在に至っております。
この後、山本先生から活動内容についてパワーポイントを使ってご説明をさせていただきたいと思います。短い時間ですが、最後までどうぞよろしくお願いします。
ありがとうございます。

災害支援くしろネットワーク
世話人副代表　山本　真吾様

山本でございます。本日はよろしくお願いいたします。

佐藤君は生徒会長でした。当時は 900 人ぐらいの生徒がいました。その中の生徒会長はなかなかのもので、とても話が上手で、人を引きつける力がありましたので、現在の経営者として成功されることも、その頃からそのような才能があったと思っております。

冒頭ですけれども、このような映像がございます。これは国土交通省で作られたものです。

（ＤＶＤ上映）

（山本様の説明）　もちろんこれはＣＧです。ただ東日本大震災並の津波が来たらこのような状況になるというシミュレーションです。
2011 年３月 11 日、この後、私は毎日テレビを見て泣いておりました。皆さんも多分そうだったのではないかと思います。
「自分もボランティアに行きたい」、ところが、どうやっていいのか全く分からないでいました。思いはありましたが全く行動ができずにいました。その時に新聞でボランティアを募集していることを知り、早速応募をさせていただきました。

この時、素直に思ったことは、自分１人が行こうと思っている時に、「何人かを連れて行くことを考えている人がいる」と。これは本当に衝撃でした。出発点から自分と考えが違う人がいるのだと思いました。

これが災害支援くしろネットワークです。システムとしては、先ほど佐々木代表が言ったとおり「思いと時間と体力はあるけれど、お金がない人」、それから「思いとお金はあるけれど、時間と体力がない人」お年寄りですね、このような人がいます。費用を補助してボランティアに行ってもらおう。いただいた寄付でボランティアを派遣しよう。これを「マッチング」と言いますが、こうしてできた会が「災害支援くしろネットワーク」です。当時、このような３人の方が中心となって活動を始めました。「悪い顔選手権」に出て来そうな顔ですけれども、熱い思いで、ずっとその後は行動を共にさせていただきました。

というのは、自分は「１回行って終わり」くらいに思っていましたが、特に佐々木代表がハッキリとおっしゃられたことは「何人送る」、「長いスパーンを考えて、10 年やる」と。その時に私も 10 年行けるかどうか分からないけれども、多少なりともお手伝いをさせていただこうと考えて、10 年が経ってしまいました。

災害の内容ですけれども、10 年間をザックリまとめますと、最初に行ったのは岩手県で、ひたすらガレキを片付ける作業です。岩手県が落ち着いてきたらボランティアの仕事（ニーズ）がなくなり、宮城県の方へ行きました。この頃になると「復旧支援」と言いますが、ザックリ言ってしまうと遺骨を見つける作業になります。この時から高校生や大学生がようやく参加をしてくれるようになりました。というのは、岩手のころはあまりにも危険すぎて、子どもが「行きたい」と言っても保護者が「行かせない」という状況でした。２年目・３年目ぐらいになってようやく「行きたい」という子どもたちは保護者から許しを得て参加するようになりました。

この時から「人材育成」や「教育支援プログラム」という形でボランティアを進めてまいりました。宮城県のニーズがなくなってきたら最後は福島県です。こちらは、原発の影響でお家に帰れない人がようやく家に帰れるのだけれども、荒れ放題になっている家を掃除する支援になりました。ですから生活支援、そして引き続き人材育成として活動をしていました。

最初の頃の岩手県です。これは吉田潤司さんの奥様と一緒に行った時です。これは小学校ですけれども３階まで津波が来ています。茶色になっている所は火事が起きたのです。これは船が横転して海に重油が流れ出る。津波が電柱をなぎ倒して電線を引きちぎり、その火花が重油に移って、燃えた津波がどんどん迫って来る。火事も一緒に重なって、このような色になってしまいました。

これは、皆さんよくご覧になった看板だと思います。上の方を拡大しますと、確実にこの高さまで津波が来ていたということです。ガソリンスタンドの支柱がねじ曲がっております。これは有名な写真で、約 200 トンの船が５ｍの防潮堤を乗り超えて来て、津波が引いた後、民宿の上にそのまま乗って微妙なバランスを保ちながら残っていたのです、これも既に撤去して、ありません。

最初にボランティアに入ったのはこのホテルで、これはホテルのロビーです。初めて分かったことは、津波が入ってしまうと天井が全部剥がされてしまうことです。天井という天井が全部剥がされて、上の骨組が見える状態になります。そしてこのような作業をひたすら繰り返して、ガレキを少しずつ少しずつ運び出すいつ終わるともしれない仕事です。

岩手の活動が終わり宮城県に移ったころに、バスで行くことになりました。この時にまた佐々木代表がハッキリと目標を打ち出しました。「人材育成をする事業」と謳い、若者を募るようになりました。この時に参加するようになった大学生・高校生に佐々木代表が繰り返し・繰り返し言っていた言葉が「ボランティアは、させていただく」です。「私たちは助けに行っている。ボランティアに行っているというより、あの未曾有の災害の中で人材を育成する機会をいただいている。そうすることにより、いつしか釧路に同じような災害が来た時にボランティアを行う仕組をつくる人材を育てることができる。ですから。させていただいているのだ」とおっしゃっていました。

このようにバスで行くようになりましたら、代表自らがバスを運転して行くのです。バスの中では、いろいろな資料などを見せるのです。いつも見せる映像、これは気仙沼市の階上中学校の震災後１週間ぐらいのころの卒業式での卒業生代表の答辞です。卒業式を行っていた体育館は避難所にもなっております。ですから避難をしている方がいる中での卒業式の答辞です。

（ＤＶＤ）（映像の音声）

卒業生答辞　「『階上中学校といえば防災教育』と言われ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私

たちでした。しかし自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練と言うには惨すぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。しかし、苦境にあっても天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です」
(「大変だな」)

　このような映像を見せるとやっぱり高校生・大学生は変わります。働き方が全く変わります。そして、ボランティアを始める前に必ず行っていたことは、黙祷を捧げることです。
下の方の緑のビブスを着ている所は福島県で、海も見えない所です。けれども海の方向に向かって必ず黙祷を捧げることを繰り返し行っておりました。それから作業に入ります。その作業の様子をまとめた映像をご覧ください。

（ＤＶＤ）（映像の音声）
「93 名の方が亡くなられた場所になります」「せーの」「来た、来た」

（山本様の説明）　これは、基本的に掃除をしています。実は遺骨捜査でもあります。このころになると、完全な遺体として残っているのではなく骨片ですね。人間の骨なのか動物の骨なのかも分からない。ですから骨のようなものを見つけたら警察に届ける。そういった作業の一環の中です。

（ＤＶＤ）（映像の音声）
「まだまだ津波が来たということを実際に自分が想像できないと感じました。でも、ここに本当に人が住んでいて、３月 11 日に亡くなった人がいることを感じながら、いろいろなものを掃除していました。また来年訪れてみて、自分がどのような感想を抱くのかを感じたいと思いました」
「今回のようにガレキやタイヤを退かせたりやゴミを除去したり、そのような活動は初めてだったのでやっぱり行って良かった」
「今日は海岸で作業をして、砂の中を探した時にヒビの入ったゴルフボールが出て来た。それを聞いた時に、多分震災の時に流されたゴルフボールじゃないかと言われて、そのようなゴルフボール１つでも、ゴルフが好きな人だったら思い出にもなるし、そのような物をもっとこれからも探して本人の元に返せたら良いと思いました」
「今日は駅付近での清掃活動を行いました。使われていた駅がいまは使われなくなった様子を見てすごくショッキングに思いました。僕たちの活動が積み重なって市民の皆さんから恐怖の思いが消えたり、また利用ができるような環境になればと思いました」

（山本様の説明）　これが、陸前高田の海岸で行われている作業です。これは何をするかと言いますと、砂をただひたすら午前中いっぱいフルイをかけます。その中に骨のようなものがないか、ということなのです。ここは既に防潮堤が建てられています。防潮堤が建てられる前に行方不明のご家族が「多分ここにいるかもしれないから探してくれ」と。ところが、警察や消防や自衛隊がこのような作業をする時期は終わっていますので、まさしくボランティアにしかできない作業です。非常に単純な作業なのですけれども、なぜ行うのかを説明すると、高校生・大学生はひたすら、本当にひたすら、休憩も惜しむようにして砂をフルイ続けます。
でも、このように笑っていますけれども、後になってから「でもね、ここに人の骨があるかもしれないと思ったら本当は怖くて震えていたんだ」と言っていました。

　このようにして、死者が出るのですけれども、どこかで見つかった骨がＤＭＡ鑑定の結果、遺体だったことから、行方不明者が減り、死者が増えていく、という作業をボランティアが行っています。終わりましたらこのように高校生は感想を言います。
　舞台は、福島に移ります。福島になったら原発の被害なので、ガレキを片付ける作業はもうなくなり、このようにお話を聞く、もうこれだけでもすごく喜びます。街には、若い人は戻って来ていません。お年寄りばかり戻って来ていますので、若い人が歩いている、自転車でいる、もうそれだけで喜んで声をかけてきます。
これは「中に入って少し話を聞いていかないかい」と、お邪魔をしたところです。このように体育館でお話を聞いて一緒に卓球もしました。最後に分かれる時、高校生が泣いてしまって抱き合って別れを惜しむ。わずか２時間くらいの時間でもこのような光景を見ることができました。
　これは、原発の被害で避難をしたお家ですけれども、実は家を片付けて撤去をする。壊す。その時の片付け、分別の作業をしております。この家はお爺ちゃんが５年ぶりに帰って来たのです。帰って来て家を片付けている夜に１人で亡くなっていたのです。朝になって、息子さんが来たらお父さんが倒れていた。「いろいろ考えたけれども、やっぱりこの家を壊すことにします」ということに。

（ＤＶＤ）（映像音声）
高校生・大学生ボランティア作業「それさー・・・」「多分・・・」

（山本様の説明） 壊す家ですけれども、このように一生懸命掃除をします。本当にきれいに、きれいに片付けます。この家は壊してしまうと分かっていても掃除をします。
ある「一言」を言うと、高校生が格段に違う動きで働きます。これも佐々木代表がバスで説明をします。「これから家のお葬式をします。亡くなった方も最後には骨に帰られる。だけど死化粧をして、きちんと身支度を整えます。壊される家だけど、きれいに掃除をしてこの家に長く住んでいて亡くなった方の思いに応えよう」と言うと、本当によく働いてピカピカにきれいにしてボランティアを終えておりました。
最初は、『東日本大震災支援くしろネットワーク』と言っていたのですが、佐々木代表が「名前はやっぱり『災害支援くしろネットワーク』にしよう。東日本大震災意外に大きな災害がこれから起きるかもしれないから、災害の時には東北に限らず出かけて行こう」としてこの名前にしました。
この時、私は「そんなに大きな災害が起きるのか」と思ったのですが、ご存じのとおり続々と起きていることで、私たちは熊本にも行ってまいりました。それから茨城県鬼怒川の災害・洪水にも行ってまいりました。南富良野にも行ってまいりました。これは当時の南富良野町長とお話をしているところです。それから安平町にも行ってまいりました。
災害支援くしろネットワークのマークです。これは手のひらに『芽』があります。これは秀逸なマークだといまになって思っております。この芽が違うところにも広がり、先ほどお話しいただいた『くしろ子ども未来塾』ができ、ごみ拾いの活動など、いろいろなところでこの活動の芽が広がっています。
昨年はコロナの影響で行けませんでした。またいつか遠くの地に行って、少しでも何かお役に立てればいいなと思っております。
残り時間がわずかになりました。では、佐々木代表、締めをお願いいたします。

災害支援くしろネットワーク
世話人代表　佐々木隆哉様

皆さん、これを読んでみてください。「できる人が、できる時に、できることをする」これは僕が最初に「行ける人が行こう。行けない人は後方支援をしていただこう」、このスローガンを南相馬のボランティアセンターに掲げられていて、「ああ、まさしくこれだ」と思いました。
東北のみならず、本当にわれわれいろいろなところにボランティア活動をさせていただきに行きました。災害は起きてほしくはありませんが、起きた時にいち早く行動ができるような会にこれからも育って、そして続けていきたいと思います。
本日は、貴重なお時間を誠にありがとうございました。

佐々木代表、山本先生、本日は大変ありがとうございました。10 年の長きにわたりボランティア活動を続けることは大変ご苦労もあったかと思います。その長きにわたるボランティア活動に敬意を表しまして、お礼のご挨拶といたします。
本日は大変ありがとうございました。

本日のニコニコ献金

■吉田　潤司君　息子と娘に子供ができ、孫が４人になりました。子供達は新たな道をスタートです。家内はライフワークに頑張ってます。
■高橋　徹次君　ここ数年の目標だった還暦までにスキー検定一級合格、最後のテストで無事合格しました。

今年度累計　　441,000 円